



体験活動

体校による学習の遅れや感染防止対策が気になる今、探究学習や行事などの特別活動は縮小傾向にあるとも聞きます。ですが、むしろ今こそ体験活動による学びが必要なのではないでしょうか。当事者である高校生に、その体験の価値を聞いてみました。

取材・文／松井大助
撮影／平山 論(18～19P)

Case 1

新型コロナウイルス対策装置を開発

学んだことと悔しさを糧に

喜多方桐桜高校(福島県立) 牧石翔さん



3年生の課題研究の授業で、6人で「新型コロナウイルス対策装置」の開発を進めています。空気中のウイルスを除く空気清浄機や、マスクの殺菌装置を、二人組の3ペアに分かれて情報交換しながら作っているんです。

元々僕らは課題研究でロボットを作り、ロボットコンテスト会津に出場するはずでした。でも大会が中止になり、そのうえ、僕はレスリング部で、メンバーに陸上部もいるのですが、部活動のインターハイも中止になり、みんながすごく悔しい思いをして。最初は落ち込みましたが、話し合うなかで「電気・電子科の授業で学んだ知識や技術を使って、このコロナウイルスに立ち向かうことはできないか」となったんです。

まずは敵を知るためにウイルスのこ

とを調べ、次にそのウイルスに何が効くかを調べました。UV-Cという紫外線が効果的だとわかったので、その原理をどう活かすかを考え、UV-Cを出す殺菌灯を使った装置を開発することにしました。UV-Cは人体にも害があるので、人が直接浴びないように構造も工夫しました。本当に1から始めたので、自分たちのやりたいことを形にするのに時間がかかりましたね。一人だと考えが凝り固まるけれど、6人でいろいろな案を出せたのが良かったと思います。

こうしたことに踏み出せたのは、電気工事に憧れてこの学校に入り、電気のことを学ぶのが好きだったからかな、と思います。勉強してきた配線や回路のことが装置の開発に活きましたし、電子部品等を扱うなかで知ったこ

Case 2

小学校にランドセル寄贈

思いを口にし、協力を仰ぐ



飯野高校(宮崎県立) 川野愛海さん

隣町の熊本県人吉市が今年の夏に豪雨被害に遭ったので、市の小学校にランドセルや文房具を寄贈する活動をしてきました。地域探究活動の授業や、放課後の時間を使ってです。

探究活動で前から進めていたのは、3人のチームで地元の子の「遊び場」兼「学びの場」となるイベントを開くことでした。でもコロナで中止になり、何ができるか考えていたときに、探究活動で関わってきたOBの先輩が、人吉市の支援を一緒にやらないかと声をかけてくれたのです。

人吉市に問い合わせると、水害でランドセルが失われたことがわかりまし

た。そこで使っていないランドセルを集めて贈ることにし、私は「文房具も同じでは」と思い、文房具の寄贈も提案しました。集めた中古のランドセルには傷があつたので、みんなで話し合っただけでランドセルカバーを手作りし、私たちの気持ちも届けようとメッセージカードを添えました。

ランドセル集めや全校生徒への協力の呼びかけには、SNSやスタディサプリ、自作ポスターを活用しました。そうしたら、想定外の3倍もの生徒が手伝ってくれて。「力になりたい」という同じ思いの人がたくさんいたことと、みんなの活動で小学校に喜んでもらえたことが、嬉しかったです。「こうしたい」と思いを口にするれば、まわりのサポートや自分では考えつかないアドバイスももらうことができます。「一人ではできないこともできるんだ」と実感しました。

前まで私は、人前で話すのがすごく苦手でした。自分を変えられたのは、1、2年生のときに、マイブ口南九州会議という、各地の高校生が集まる場に参加したのがきっかけのように思います。他校の生徒や、大学生や大人と一緒に自分のやりたいことを考えてみたら、「いろ



探究活動の授業では、子育て支援への思いを級友の前でも説明。その仲間の協力もあり、多数のカバー付きランドセルや文房具を届けることができた。

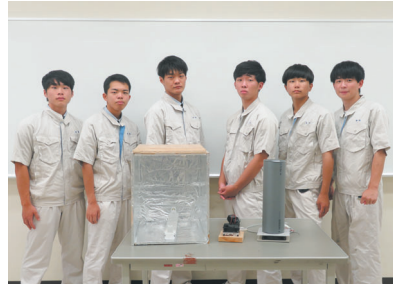




Case 3

オンライン文化祭を開催
自ら動く世界が広がった

松本県ヶ丘高校(長野県立) 松岡大輝さん



新型コロナウイルス対策装置の開発に挑んだ6人のチーム。ウイルスの特徴や対策方法の調査を6人で行ってから、2人組で3つの装置を開発。完成後、実際に学校で使用する予定だ。

ともあって、自分の興味も広がりました。学んだことを基に何か作るなら、人に役立つものを作りたい、とも思っ

たんです。

先生たちが自分たちの案を否定せず、「いいじゃん、やってみよう」と前向きに支えてくれたのも大きかったです。メディアにも取り上げられて、近所の人や企業の方からも反応があり、「自分たちのやったことがいるんなりに伝わる」のって、すごく嬉しいなあ、とも思いました。

同じ世代の高校生には、自分より悔しい思いをしている人もいると思うんです。でも、お互いに腐らずにいたらなあ、と思います。この悔しさをバネに変えられたら、きっと強いので。



僕ら生徒会は、春にコロナ対策のためにオンラインで生徒総会を開きました。YouTubeと音声チャットアプリを使い、みんなには自宅からの参加をお願いし、アプリの機能で、生徒会の予算案や議案への投票を行っただけです。全校957名中937名が参加してくれて、オンラインを活用して文化祭を行う案も承認されました。絶対中止にしたいなかつたんです。生徒会や各委員会でも

度も話し合った甲斐がありました。実は文化祭については、実行委員長は「文化祭の発表のためにリアルでやりたい」と主張していましたが、他の生徒から「命に変えられない」と説得されて、それでも発表の場は作りたくて、アイデアを出し合い、事前に文化祭の動画を撮り、文化祭当日にライブ配信を行い、地元紙に掲載した二次元バーコードから動画再生もできるように

いろいろな人と交流しながら視野を広げるのは楽しい」と思えたのです。飯野高校には、マイプロ以外にも発表や交流の場がたくさんあるので、人前で話すのも前ほど苦手ではなくなりました。卒業後は看護の学校に進みたいと思

しました。結果的に、今まで文化祭に來られなかった高齢の方にも見てもらえて、お手紙まで頂いて。自分の固定概念に縛られず、みんなが新しいものを創り出す大切さを学びました。

自分たちで動けたのは、1つ上の先輩が生徒会活動を改革するのを見ていたからだと思います。先生たちも提案を受け入れて、「ここをもう少し考えたら？」とアドバイスをしながら協力してくれました。だから僕らも「自分たちで変えるのが当然なんだ」と思って企画していました。

長野県中信地区には生徒会の交流会があるのですが、そこで「他の学校ではそんな企画や活動をしているんだ」と知ったことも、よい刺激になっていました。さらに今年は、中信地区だけでなく長野県全体の生徒会で集まるオンライン交流会も僕らで企画しました。悩みを話し合い、みんなの意見をまとめて県教委に伝え、高校生の思いがもつと大人に届くようにしたからです。

ついています。将来、地元で子育て支援をやりたくて、探究活動でもその必要性を感じたのですが、相談に乗ってあげたくても自分にはまだわからないことが多くて、もっと専門性を高めたい、と思ったからです。

自分の経験からしても、高校生はあの程度自分で考えて結論を出すことができる、と言えます。だから、全国の学校の先生には、方針を先に決めすぎないでほしいな、と思っています。随時相談にのってもらえ、高校生が自分から動ける状態にしてくれると、それによつて僕らだけではない見えないことにも気づき視野も広がり、一緒に考える楽しさを知ることができるからです



ライブ配信もした文化祭。開始時にみんながそれぞれの場からクラッカーを鳴らし一体感を楽しむ工夫も。松岡さんも手作りバズーカ型クラッカー(上の切り抜き写真で脇に携えたT字の物体)で号砲を鳴らした。



小さなことでも自分で何かを創り出す体験が 生徒の可能性を开花させ、この社会を変えていく

体験活動の課題の一つが、生徒の意欲の落差です。やらされ感満載の生徒や、戸惑っている生徒には、先生はどう接していけばよいのでしょうか。「JK課」や「ニート株式会社」などユニークな取組で、多様な人と創造的なプロジェクトを進めてきた若新雄純さんにお話を伺いました。

**主体的に動けない生徒は
自分の可能性をまだ知らない**

——今回の誌面では、探究活動や生徒会活動のように「自分の思いや課題意識をもって動く体験」がどんな学びをもたらすかを、生徒自身にお聞きしました。ただ、「主体的に動ける生徒は一部」との声もあり、実際、「口ナ禍で先生のサポートが手薄になると、大半の生徒は日々の勉強も含めて停滞してしまいました。この落差をどう捉えればよいでしょう。

僕が幼い子たちを見ていて思うのは、生まれながらに主体性のエネルギーが弱いということは絶対ない、ということです。保育園児は、日々動き回ったり何かに没頭したりして、探究心をもつて学んでいますよね。

ただ、今の大半の高校生が自分から動けないのは当然じゃないですか？

小さい頃から「静かにしなさい」と行動を制限されてきたので。

社会が成熟した今は「決められたことをやるだけでなく、自分たちで創造しないといけない」とよく言われますが、そのわりに中学校から叩き込まれるのは、古い社会の縮図なんですよ。「校則や上下関係を守れ」という。その前提にあるはずの「ルールや関係性はみんな創り出すもの」ということはあまり学べません。

——その話と重なるかもしれませんが、日本財団の18歳意識調査(※)によると、「国や社会を変えられると思う」という質問に「はい」と答えた若者は、先進国の中で最下位でした。

それが可能なのを「知らないだけ」ですよ。校則すら変えたことがないのに、社会を変えられると思うわけがない。だから、校則でも探究活動や学校行事でも、小さなことでいいので高

校生が自分で何かを創り出す体験をもつてほしいですよ。

とはいえ、特に地方では「難関国立大学の合格」が先生や親から一番喜ばれることであり、その受験では「決められた教科を満遍なく勉強すること」が求められます。この価値観が今も強すぎるんですよ。

「決められたことをやる」ことを否定したいわけじゃないんです。それが得意な人はそれでいいし、答えのない社会になろうと、法律の運用や鉄道の運行など、決められたことをきっちりできる人の活躍の場はなくなりません。でも世の中にはシステムを守るより作り変えるのに向く人もいて、その「創造」と「運用」の役割分担で世界はまわると思うんですね。

にもかかわらず、これまで多くの学校は、校則遵守や受験のシステムに乗れない生徒を「問題だ」「できない」と

みなしてきました。そうした生徒には「それもあり」と認めてもらえる他の選択肢がなかったんです。

だから、仮にこの先、今度は探究活動で自分からなかなか動けない生徒を問題視し、「できない」とするならば、僕はそれもおかしいと思います。「こうしなきゃいけない」「選択肢はない」という環境が、そこになじめない生徒から自信を奪い、自分には価値がないという思いを抱かせるんですよ。

**高校生を解き放つのは
「共にやる人」と「多様な人」**

——では、探究活動や生徒会活動で、生徒がもつと自分を出せるようにしたいなら、どうすればよいでしょう。

先生が「先生」ではなくなることだと思います。「教える人」であり、答えを知っていて「評価する人」であるという。その存在にならないよう、「大人



未来という言葉、禁止にしませんか？ 生徒の「今」のエネルギーが高まるように

の決めた手順で大人が決めた正解にたどり着かせる」のではなく、「先生も答えを知らない、評価できないことを一緒にやる」ようにしてほしいです。そうして生徒たちが、この人たちは評価する人ではなく、「共にやっっていく人」なんだと信頼すると、素を見せるようになります。

僕の経験上、その空気ができるまでに3カ月から半年はかかりますね。福

井県鯖江市で、女子高生がまちづくりにするJK課を市役所内に立ち上げたことがあるのですが、校則を守らないような女子高生でも、最初は大人の顔色をうかがうんですよ。散々怒られてきたので「ここでは自由にして」と言われてもトラップだと警戒して。

地域連携のように、先生ではない大人を混ぜるのも手です。地域の大人つて、乱暴なことも言うし、先生が

期待する方向に生徒を連れていくとは限りません。でもそれが嫌で先生が納得できる人だけ呼ぶなら、結局「例外は認めない」ということ。「先生はこう思うけれど、それもあるよね」といろいろな考えを受容することが、選択肢をなくさないことになるんです。「こんな人もいるのか」と価値観の多さに驚かされると、生徒の視野は広がり、今までの環境にとらわれず「自分はどうしたいのか」を考えられるようになります。

いつ開花するかわからない 生徒の変化を見取ってほしい

探究的な活動は「成長が非線形で現れる」のもポイントだと思います。この量をやればこれくらい伸びる、ではなくて、その子の意欲や可能性がいつ開花するかわからない。高校3年間で全員の活動がしっかりと着地するものでもない。だから待つ必要があるのですが、そもそもみんなを同じペースで学ばせようとするから、他人と比べて「できない」となるわけで。一人ひとり学びのスピードは違うので、いつまでに何をと先生が計画するのではなく、個々の生徒の変化を丁寧に見てほしいです。

鯖江市のJK課では、女子高生がコスプレしてごみ拾いをすることを企画したとき、「市のごみ袋がださい」と漏

らした彼女たちの声に、市の職員が反応し、ピンクとブルーのごみ袋が生まれました。そうやって大人がちゃんと応えようと、生徒たちは「自分がここにいたい意味」や「活動をする意味」を見出せると思います。

あとは、常々思っているのですが、大人が「未来」という言葉を使うのをもう禁止にしませんか？ 大人が勝手に想定した未来に向けて「こんな力をつけろ、受験をがんばれ」と言うことで「今」が犠牲になっているように思っていますよ。むしろ高校生には「今自分はどんな気持ちで何をしたいのか」と、もっと今に目を向けてほしい。そうして高校生が「自分の中から湧き上がるエネルギー」を感じられるようになり、「それを社会の中でどう生かすか」という発想に結びつけたときに、初めて成熟した主体性が生まれ、自分たちの手で社会を創造していけるのだと思います。

株式会社NEWYOUTH 代表取締役
慶應義塾大学
大学院政策・メディア研究科
特任准教授
若新雄純

わかしん・ゆうじゅん ●プロデューサー・研究者。
TV番組のコメントーターとしても活躍。全国
高校生マイプロジェクトの審査員も長年務める。
専門は「創造的コミュニケーション」。共著
に『スタディサプリ三賢人の学問探究ノート
(2)社会を究める』(ポプラ社)。